

連携に向けた課題を見つけ現場で即応できる救助体制を構築するために

第2回災害救助犬 組織連携訓練会 速報

担当幹事団体：救助犬訓練士協会 日本救助犬協会 災害救助犬ネットワーク



2015年12月13日 日本救助犬協会埼玉県富士見訓練場にて 11団体 計56名（岩手～三重）

共通認識された課題：安全確保・作業動線効率・犬の確実性



救助犬団体毎の搜索訓練(AM)

指揮本部は埼玉県警。被災地設定と搜索チームを別救助犬団体が交互に行い、他団体の搜索法等を知ること、実出動時の合同チーム編成時の備えとなった。犬の生体反応見極めについては、常時訓練で接している犬とサポーターであり、そのチームであれば判別可能か。アラートの確実性を上げていく事は必要。

他団体混成チームでの搜索訓練(PM)

被災地設定と指揮本部は茨城県稲敷消防有志。現着順に救助犬混成チームが搜索する想定。他団体のメンバーと犬との初めてのチーム編成。広島土砂災害時運用実績があり、実出動では常となる搜索法の訓練。隊員間意志疎通と、指示徹底が効率に影響。ICS習熟も課題か。生体反応見極めについては、初めて組む場合でも、練度がレベルに達している犬と、習熟したサポーター2名が看取すればアラートなしでも犬の微反応で要救助者位置特定が可能。犬の練度の基準は団体間で違うが、合わせていく必要が見えた。



茨城県稲敷消防様より

救助犬チームの自己安全確保の意識と技術向上を。初めて救助犬搜索を体験し、要救助者発見スピードに、現場での有効性を見た。知らない消防が多いのは残念。

東北大学大野教授様より（移動ロボット研究）

同じ動きを繰り返す、同じ指示を何度か行う、同じ指示でも使う言葉が違う等の行動を改善すれば30%時間の短縮ができ、その時間を人命救助に使える。

日本救助犬協会 森脇和男(担当幹事)

被災地想定地の搜索前観察重視を。細部の特定作業を大切に。合同訓練を継続し、救助犬が組織を超えて機能し社会貢献を。

速報担当：災害救助犬ネットワーク 広報部